

那須のよいちむねたか  
まつぐちげつじょう  
那須与一宗高（松口月城）

一矢弦に在り 一生を懸く

むねたか  
宗高の心事 孰か 情に堪えんや

げんぺい  
源平の合戦 詩趣 多し

ぐんせん  
軍扇 翩翩 浪に 入って 明らかなり

一矢在弦懸一生 宗高心事孰堪情  
源平合戦多詩趣 軍扇翩翩入浪明

解説 源平屋島合戦の折り、平家の軍船が扇の的を船の先端に掲げた。与一は義経の命により海中馬上より見事に射落とし源平両軍の称賛を得た故事を詠った詩。

語釈 ※那須与一 平安時代末期の武将。那須岳で弓の稽古をしていた時、那須温泉神社に必勝祈願に来た義経に出会い、資隆が兄の十郎為隆と与一を源氏方に従軍させる約束を交わしたという伝説がある。※一矢 一本の矢。※弦 弓のつる。※懸 かける。一生をかける。※心事 心の中で思っていること。心中。※源平 源氏と平家。※詩趣 詩に表された情趣。詩的な興趣。※軍扇 武将が戦場で軍勢を指揮するのに使う扇。※翩翩 軽やかにひるがえるさま。

通釈 一本の矢に自分の一生をかけなければ成らなくなった。那須与一の心情は全く情に堪えない。そして、源平の合戦は色々な情趣が有るが、これを外せば源氏の恥。与一は命を懸けて海に入り込み軍扇を見事に射落とした事は明らかである。